

周作人と世界語

—その出会いと結実—

藤田一乗

序

世界語とはエスペ란トの中国語訳である。この世界語という単語は元々日本からの借用⁽¹⁾であり、それが中国で定着した。始まりからもわかるように中国の世界語は日本のエスペ란トと馴染みが深い。

このエスペ란トは、1887年7月26日、当時ロシア領であったポーランドで発行された『国際語』から始まる。この人工語を作ったのは、ポーランドのユダヤ人眼科医であるラザロ・ルドヴィコ・ゼメンホフ（L. L. Zamenhof 1859-1917）であった。それが世界中に広がり、1905年にはフランスで第一回万国エスペ란ト大会が開催されるまでになった。

このエスペ란トが中国に伝わり、1917年には、北京大学で世界語の授業が開講され、1923年には北京世界語専門学校⁽²⁾が開校されるまでに発展した。

この世界語が中国に広がる上で、重要な役割を果たした人物の一人に周作人がいる。この論文では周作人がそのように世界語と出会い、結実していったかを考察していきたい。

第一章 周作人の世界語との出会いとその時期

第一節 周作人と世界語の出会い

周作人はいつどのようにして世界語と出会ったのであろうか。それは当然周作人が日本に留学した時であろう。しかしその正確な時期はよくわからない。周作人は1906年9月から1911年9月

まで日本に留学している。その当時の言動が分かる日記等の資料が有ればいいのであるが、残念ながらほとんど存在しない。周作人は、その回想録である、『知堂回想録』「九六 臥治時代」で、

在東京留学時代這六年中都沒有写日記、所以有些事情已經記不起来了、到了民国元年這来又繼續来写、從十月一日起、一直写到現在。

（東京留学時代の六年間日記は書かなかった。それ故事情の幾つかは書くことは出来なくなった。民国元年になり又書くようになり、十月一日から今まで書き続けている）

とある。では何時世界語を学習したのか。以下に検討してみる。まずこの件について言及している資料を見てみる。

①「魯迅、周作人とエスペランティストたち（一）」⁽³⁾には、

一九七四年香港で出版された『知堂回想録』によれば、周作人がエスペラントを学んだのは、一九二一年六月から九月まで病氣療養のため北京郊外の西山碧雲寺に滞在したときである。

②『中国世界語者と世界語運動』「下篇 中国世界語人物志 周作人」⁽⁴⁾には、

在日本留学期間学習世界語。本世紀初即通過世界語翻譯東欧文学作品向国人介紹。

（日本留学時期に世界語を学習する。今世紀初頭世界語の翻譯を通じて東欧文学作品を国内の人に紹介した。）

③「魯迅与世界語」⁽⁵⁾には、

1908年、張繼在日本東京《民報》社舉辦世界語講座、宋教仁、章太炎、朱執信、周作人、魯迅、蘇曼殊也加入聽衆的行列。

（1908年、張繼が日本の東京の《民報》社において世界語講座を開講した。宋教仁、章太炎、朱執信、周作人、魯迅、蘇曼殊が聴衆の列に参加した。）

以上、代表的な見解を三つ挙げてみた。ではそれぞれを検討していく。

先ず①では周作人は1921年6月から9月まで、世界語を学んだという見解である。『知堂回想録』「一三六 西山養病」に、

我住在西山前後有五箇月、一辺養病、一辺也算用功、但是這並不是什麼重要的工作、主要的只是學習世界語、翻譯些少見的作品。後來在小說月報上發表的從世界語訳出の小説、即是那時的成績、可是更重要的乃是後來給愛羅先珂做世界語講演の翻譯。

（私が西山に住んでいた前後五ヶ月、療養しながら、勉強していたが、これは何も重要な仕事ではなく、主なものは世界語を学習し、あまり見ない作品を翻訳しただけである。後日『小説月報』で発表したものは世界語から訳出した小説が、あの時の成果であった、しかし最も重要なのは後日エロシェンコが世界語で講演した翻訳である。）

とある。この年の初めから周作人は体調を崩しており、三月には山本医院に入院している。退院後に療養の為に西山碧雲寺に移り住み、そこで世界語を学習した。

しかし僅か五か月の間に初めて世界語を学び始め、それを『小説月報』上で文学作品の翻訳を発表するほど上達することは、いかに周作人とはいえ無理であろう。後述するように、周作人がここで初めて世界語を学習しはじめたのでは決してない。正確には学び直したのである。

②と③は日本留学時期に世界語を学習し、③では張継が民報社で開講した世界語講座で学習したとの見解である。

先ほども触れたように周作人の留学時期の日記等の資料はない。さらに魯迅もこの当時の日記等がないので、本当に周作人や魯迅が世界語を学習したのか、またそれが世界語講座で学んだのかはよく分からない。

またこの張継の世界語講座であるが、これも本当に開講されていたのかどうか、現在の所不明であるが、少し張継について触れておく。

張継（1882-1947）、字は溥泉、1899年、日本に留学、1908年にはフランスに留学する。そこで雑誌『新世紀』創刊し、アナキズムや世界語を主張する。フランスで世界語を主張した張継が、日本ではどうであったか。張継は、社会主義講習会という勉強会を開催している⁽⁶⁾。1907年8月31日に第一回目の社会主義講習会が開催され、第七回目で、「無政府党本部の状況、及びエスペラント教育の提案」という報告をしており、確かに世界語には積極的であった。

しかし周作人が直接社会主義講習会に参加した証拠は無く、民報社の中に開講したとされる世界語講座に至っては具体的なことは分からない。さらに「章太炎が聴衆の列に参加した」とあるが、章太炎は「駁中国用万国新語説」⁽⁷⁾を書いて、中国での世界語採用について反対している人物である。その章太炎が世界語講座に本当に参加したのか疑いが残る。

では、周作人が日本で世界語に出会わなかったと言えるのであろうか。直接的な記述は現段階では掴めていない。しかし日本留学当時の状況では、出会わなかったほうが不自然だと考える。少し周作人から離れるが、その当時の日本の世界語と中国人留学生関わり的一端をみていく。

第二節 日本のエスペラントの状況

日本のエスペラントの状況はかなり詳しい書籍や論文があり、中国の状況に比べればはるかに解明されている。以下に『日本

エスペラント運動史』⁽⁸⁾に基づいて、周作人が留学していた時期を中心に見ていく。

1887年に誕生したエスペラントは、1903年に岡山に住んでいたG.E.ガントレットが世界語を学び始めたことから、日本におけるエスペラントの活動が始まる。ガントレットはその後、講習会を開き、当時働いていた高校でも学生にエスペラントを教え、通信教育も開始した。この通信教育は後の日本エスペラント協会の母体になる。1906年には、二葉亭四迷のエスペラントの教科書である『世界語』、『世界語読本』が次々に出版され、同年6月に、東京帝国大学の黒板勝美を中心に日本エスペラント協会が設立した。しかし1908年に黒板勝美が欧州出張に旅立つと、エスペラントの勢いは衰退していく。

このような状況下で誰が中国の世界語運動に寄与したのか。

まず一人目は、さきほど触れた張継であろう。張継は早稲田大学に在籍し、無政府主義を声高に主張した。幸徳秋水や大杉栄らとも積極的に交流した人物である。

二人目には、劉師培が挙げられる。劉師培（1884-1919）、字は申叔、1907年に日本留学、『天義』『衡報』を創刊。そこで無政府主義や世界語を提唱し、それらに関する数多くの論文を掲載した。1908年に帰国。帰国後清朝側に寝返る。周作人は留学していた時、この『天義』に何度か論文を掲載しており⁽⁹⁾、当然『天義』の世界語に関する論文も見ていたはずである⁽¹⁰⁾。『知堂回想録』「156 北大感旧録（二）」には、

我與申叔早就有些關係、所謂「神交已久」；在丁未

（1907）前後他在東京辦「天義報」的時候、我投寄過些詩文、但是多由陶望潮間接交去」

（私と申叔には早くから少し関係が有り、いわゆる「書面での付き合いはすでに長い」である。丁未の頃彼は東京で『天義報』を創刊し、私は詩文を投稿したが、多くは陶望潮を介しての付き合いだった）

とある。留学時期に実際に面識が有ったどうかははっきりしないが、交際は有った。

最後に銭玄同を挙げる。銭玄同（1887-1939）、字は中季、1906年、日本の早稲田大学に留学。1910年帰国。1916年に北京大学に奉職。その後『新青年』で文学革命や世界語の提唱を行った。周作人とは、この当時からの知り合いで、例えば、『知堂回想録』「80 民報社聴講」には、

往民報社聴講、聴章太炎先生講「説文」、是一九〇八至九年的事、（略）即許季荊和錢家治、還有我們兩人。未生和錢夏（後改名玄同）、朱希祖、朱宗萊、都是原来在大成的、也跑来参加、一總是八個聴講的人。

（民報社に行って聴講し、章太炎先生の「説文」を聞いたのは、1908年から9年⁽¹¹⁾の事だった。（略）許季荊と錢家治、更に私たち二人（魯迅と周作人を指す、筆者注）。未生と錢夏（後、玄同と改名）、朱希祖、朱宗萊は皆大成に住んでおり参加した。全部で8人であった。）

とあり、魯迅や周作人と共に章太炎の講義を聞きに行く親しい間柄であった。銭玄同は、中国に帰国後、『新青年』で世界語の採用、普及を盛んに主張することになるが⁽¹²⁾、銭玄同と世界語の出会いも又た日本留学中である。「世界語名著選序」⁽¹³⁾には、

1906年我在日本、就見過關於世界語的讀本等等。1907年、吳稚暉、李石曾、褚民誼諸先生在巴黎辦《新世紀》周刊、大大地鼓吹世界語、我那時看了、覺得心痒難熬、恨不得立刻就学会它。1908年、劉申叔先生在日本請了大杉栄先生来講授世界語、我趕緊去学、学了一星期光景、總算認得了二十八個字母。

（1906年私は日本に居り、世界語に関する読本などを見たことがある。1907年、吳稚暉、李石曾、褚民誼の諸先生が

パリで《新世紀》を創刊され、大いに世界語を鼓吹し、私はその時読んだが、大変もどかしく、直ちにそれを学びたくなった。1908年、劉申叔先生が日本で大杉栄先生の世界語の教授を頼み、私は急いで参加し、一週間学習したが、結局わずか28字を覚えてただけであった。)

とある。1906年と言えば、二葉亭四迷の『世界語』『世界語読本』、日本エスペラント研究会が編集した『世界語獨習』等が出版されており、錢玄同が見たのは、恐らくこれらの書籍だったのであろう。

又「論世界語與文学」⁽¹⁴⁾には、

劉申叔、張溥泉諸君在日本、請彼国之大杉栄君教授此語、其時日本此語亦始萌芽。

(劉申叔、張溥泉諸君は日本で、大杉栄君にこの言葉を教授することを頼んだ、その時日本でこの言葉が萌芽したのである。)

とある。錢玄同は留学時期に世界語を学習したのは間違いなく、それを友人であった周作人が見聞きしていたと考えても、それほど不思議ではないであろう。

ただ中国人と世界語の関わりからみると、これらの資料からは日本の大杉栄が大きな役割を果たしていることがわかる。大杉栄と中国人留学生との関わりは、專著、論文があるのでそちらを参照すればわかるが⁽¹⁵⁾、一例を挙げると、当時日本に留学していた景梅九の『罪案』「吞氣吞氣」に、

有一天在某處楼上、開秘密会、被警察知道了、到楼上干涉、把許多人趕下楼去、我没理会他、但向大杉栄先生請世界語的讀法。

(ある日某所の二階で秘密会を開いたが、警察の知る所となった。二階に踏み込まれ、多くの人間が二階から放り出

された。私は相手にしないで、大杉栄先生に世界語の読み方を教わった。)

とあり、大杉栄と中国人留学生との関わり的一端を垣間見ることができるが、大杉栄と周作人との直接の関係は見いだせない⁽¹⁶⁾。

以上に周作人の留学時期の日本の世界語と中国人留学生との関わり的一端をみてきた。周作人と世界語の直接関わった証拠は今の所探し当てることはできなかった。しかし周作人の周辺には世界語に関係する書物、人物は数多くあり、当然有程度は理解していたと考えられる。

第二章 帰国後の世界語との関わり

第一節 帰国から静養まで

第一章では留学時期の周作人と世界語の関わりを見てきたが、今度は中国に帰国してから周作人がどのように世界語と関わっていたかをみてる。

1911年9月に帰国した周作人は故郷の紹興に帰り、翌年教育司の視学官として杭州に赴任する。しかし体調不良により辞職。1913年には浙江省の中学で英文教師になる。そして1917年には北京大学文科の教授に就任することとなる。1921年には、体調を著しく壊し、西山で静養することになり世界語を勉強するとなるが、帰国して西山静養まで、世界語と全く関わりがなかったのかと言えは全くそうではない。以下に世界語との関わりを『周作人日記』（以下『日記』と略す）⁽¹⁷⁾等を元に一覧にまとめてみる。

1913年12月 9日 下午往大街買Jones:《The Esperanto Manual》

1913年12月16日 閱《世界語要略》至一百叶。

1915年 8月12日 晚閱Jones世界語書。

- 1919年 3月 1日 在出版部購『大成エスペラント和訳辞典』。
- 1920年 9月 2日 往大學、借世界語書不得、即返。閱 Jones『世界語教本』。
- 9月 10日 借来世界語書二本。
- 9月 11日 閱『世界語文選』。
- 9月 12日 下午閱『世語文選』。訳詩数章
- 9月 14日 閱《文選》。
- 9月 22日 上午得孫芾仲君函、世界語書二冊。
- 9月 23日 訳世界語本小説二篇。
- 9月 27日 至聖經会購世界語『新約』、不得。
- 9月 28日 「世界的霉」（1921年4月1日『新青年』第8巻第6号）
- 9月 30日 「一滴的牛乳」（1921年4月1日『新青年』第8巻第6号）
- 10月 5日 至東堂子胡同訪蔡先生、托買世界語書。
- 11月 1日 「雜訳詩二十三首」（1920年11月1日『新青年』第8巻第3号）
- 10月 23日 晚得孫芾仲君送来改正世界語規則 并字表一紙。
- 12月 1日 還吳君世界語書一冊。
- 12月 2日 下午托重君至日郵局取丸善廿一日小包、内『文学之現代的研究』及世界語書一冊。
- 12月 24日 上午訳世界語本小説。
「愿你有福了」（1921年4月1日『新青年』第8巻第6号）
- 書目 12月 世界語文選

以上周作人が日本から帰国した1911年9月から西山で静養する1921年6月までの世界語に関する事柄を挙げた。一目で分かるように、これだけの項目が有り、西山で初めて世界語を学習

し始めた訳では無い。以下に上記の項目をもう少し詳細に見て行く。

1913年12月9日、ジョーンズの『The Esperanto Manual』を大通りで購入とある。この年の3月に周作人は浙江省第五中学の教員として赴任して来た。そこで購入したのが『The Esperanto Manual』である。この『The Esperanto Manual』は、1913年、ロンドンで出版された世界語のテキストで、25課で構成されている。ただこの本の著者のジョーンズ (Margaret L. Jones) という人物の詳細は現段階では不明である。

同月16日には『世界語要略』を100頁読んだとある。この『世界語要略』は日本で出版されたようでは無いので、中国で出版された書籍なのかも知れないが、詳細は全く分からない。

1915年8月12日にもジョーンズの世界語の書を読んだと有る。恐らく『The Esperanto Manual』のことであろう。

その後暫くは世界語に関する記述は見当たらず、1919年3月1日に『大成エスペラント和訳辞典』を購入したと有る。これは1914年6月に中村精男、黒板勝美、千布利雄の共著で、日本エスペラント協会から出版された辞書である。中村精男は日本エスペラント協会の初代理事長、黒板勝美は東京帝国大学教授、千布利雄は大杉栄のエスペラント学校⁽¹⁸⁾の第一期卒業生である。周作人は1919年にはすでに北京大学の教授であり、学内の出版部でこの書籍を購入している。北京大学で世界語の授業が始まったのは、1917年11月からであり、学内で世界語の辞書やテキストが比較的容易に購入できたのであろう。

その後立て続けに世界語の書籍を読み翻訳していることから、この頃には世界語の翻訳出版の計画が有ったと考えられる。

1920年の9月に入ると、磧を切ったように世界語の記述が出て来る。2日には大学に行き、世界語の書籍を借りるが得られず、ジョーンズの『世界語教本』を読む。この『世界語教本』は前述した『The Esperanto Manual』であろう。10日には世界語の書物を二冊借りているが、どのような書籍なのかは不明である。11日には『世界語文選』を読むとある。これは周作人の日記の年度内の書籍購入リストの中にもあるので、購入した書

籍であることがわかる。12日には、『世界語文選』から詩を訳出し、14日も閲読している。22日は孫芾仲の手紙と世界語の書物二冊を得たとある。孫芾仲は孫国璋ともいい、エスペランチスト。1917年蔡元培に北京大学に招かれ、世界語の教師をしている人物である。10月23日にも孫国璋から世界語規則を受け取ったとあるので、周作人は北京大学での世界語の授業にも多いに寄与していたと考えられる。

9月27日には聖經会で世界語の『新約聖書』を買おうとするもできなかったとある。この『新約聖書』は現物を見ていないので、全く詳細不明である。

10月5日に、蔡元培を訪ね、世界語の書物を買うことを頼んだとある。この時期に関する記述が『知堂回想録』「二〇五拾遺（巳）」に、

世界語是我自修得來的、原是一冊用英文講解的書、我在暑假中臥讀消遣、一連兩年沒有一口氣把它讀完、均歸無用、至第三年乃決心把這五十課學習完畢、以後借了字典的幫助漸漸的看起書來。那時世界語很不易得、只知道在巴黎有書店發行、恰巧蔡子民先生行通欧州、便寫信託他代買、大概寄來了有七八種、其中有世界語文選與波蘭小說選集至今還收藏書。

（世界語は私は自修して会得した、もともと一冊の英文で解説した書物があり、私は夏休みの間横になりながら読書をし、暇をつぶし、二年で一気に読み終えることが出来ずすべて無に帰した。三年目になりこの50課を学習し終えようと決心し、以後字典の助けを借りて徐々に読めるようになった。あの時世界語の書物は容易に手に入れることができず。只だパリで出版行している書店⁽¹⁹⁾が有ることは知っており、折よく蔡子民先生が欧州に行くので、手紙を書いて彼に買ってくれるよう頼んだ、大体7、8種の書籍が送られて来て、その中の『世界語文選』と『波蘭小説選集』は今もまだ蔵書にある。）

とある。この“夏休み”は北京大学に在籍した時期のことであろう。そこで英文の解説書で勉強している。この英文の解説書とは、1913年に購入したジョーンズの『The Esperanto Manual』とも考えられるが、『The Esperanto Manual』は全25課なので、全50課との記述に符合しない。周作人の記憶違いなのか、これとは別の世界語のテキストがあったのかは、不明である。辞書の助けとは、『大成エスペラント和訳辞典』のことであろう。

しかしこの頃は世界語の書籍は手に入れることが難しかったようで、パリに行く蔡元培に頼み7、8冊買ってもらい、その中で手元には『世界語文選』と『波蘭小説選集』があった。

蔡元培は1920年10月から1921年9月までヨーロッパに視察に行っている。しかし『世界語文選』は已に触れたように1920年9月には手元にあるので、記述が矛盾する。恐らく『知堂回想録』が記憶違いであろう。

12月1日には呉という人物に世界語の書物を返しているが、この呉というのは、1920年9月4日に「與吳敬軒君閑談」とあり、吳敬軒のことだと思われるが、この人物の詳細は不明である。

12月2日には、日本の丸善からの小包に世界語の書物があったとある。日本からの世界語に関する書物を取り寄せていることがわかる。

以上に静養前の周作人の世界語にかんする動向をみてきたが、極めて精力的に世界語の学習にとりくんでいたことがわかる。静養で初めて世界語を学び始めたのではなく、日本から辞書等を購入、学習している、それはどのような形で結実していったのか。

第二節 「雑訳詩二十三首」

帰国してから静養まで、周作人の世界語の取り組みを見てきた。その取り組みの成果の一つに1920年11月1日の「雑訳詩二十三首」がある⁽²⁰⁾。

これは『新青年』第8巻第3号に掲載されたもので、雑詩と書いているが、英語、ギリシャ語、世界語から翻訳した詩であった。その序文にはその翻訳の方法と動機が書いてある。

九月裏我從世界語會借到幾本世界語（Esperanto）的文選、隨意訳読、見有幾篇詩歌、頗有趣味、便將他們寫下。以後又從別處訳出若干、合起来共得二十三首、且在新青年上發表一回。（略）一九二〇年九月三十日記。

（九月に私は世界語会から数冊の世界語の文選を借りて来て、思うように読んだり訳したりし、その数篇の詩歌を見て、大変情緒があったので、それらを書き出した。その後また別の所から若干訳出し、合わせて23首になり、『新青年』で一度発表する。1920年9月30日記す。）

この文章は1920年9月30日に書かれたものである。『日記』にはこれに関する記述はない。この23首の訳詩は世界語会から借りた世界語の数冊の文選とまたそれとは別の書籍から訳出し、それらを合わせて発表したとある。ここで借り元の一つとして世界語会が出て来る。1920年当時に世界語会という組織は見いだせなかった。ただ世界語研究会は存在した。この研究会は1919年10月に北京大学で設置された研究機関であり、会長は学長である蔡元培が兼任していた。おそらくこの会から世界語の書籍を借りていたと考えられる。ではどのような作品を世界語から訳していたのか。

① 第一首目「囚人」。リトアニアの民謡である。文末に、

這首詩据同勃羅夫斯寄（A. Dombrowski）的世界語訳本、從柴孟呵夫（L. Zamenhof）所編的模範文選訳出。

（この詩はドブロンスキーの世界語の訳本に据り、ザメンホフの編纂した『模範文選』から訳出した。）

とある。ドブロンスキーはリトアニア人で、世界語の学習書を

著作した人物である⁽²¹⁾。

② 四首目「雲雀」。チェコの民謡である。文末に、

洛倫支 (F. Lorenc) 世界語訳本、在模範文選中、無第四節、今据古代斯拉夫文学史第八章所引補引。

(フランシスコ・ローレンツ (Francisco Valdomiro Lorenz 1872-1957) の世界語の訳本は、『模範文選』の中にあるが、第四節が無く、今は『古代スラブ文学史第八章』に依て補完する。)

とある。フランシスコ・ローレンツはエスペランチスト、ブラジルに居住しているが、詳細は不明。

③ 十六首「秋天」。文末に、

耶戈洛夫 (D. Jegorov) 不知道是那里人、—或者是俄国人、—這一篇原是他用了世界語所作的、載在柴孟呵夫編的模範文選裏。

(ジェゴローフがどのような人物かは分からない。もしかしたらロシア人かもしれない。この一篇は彼が世界語で書いたもので、ザメンホフの『模範文選』に掲載されている。)

とある。周作人同様、この作者のジェゴローフの詳細は不明である。

④ 十七首目「我説」。文末に、

凡貝爾格 (Vejnberg) 也不知道是那里人、這篇詩經哈勒爾 (E. Haller) 用世界語訳出、載在模範文集裏。

(ヴェンインベルクもどのような人物かは分からない。この詩はハーラーが世界語で訳出した後、『模範文選』に掲載された。)

とある。

⑤ 八首目「莫説」。文末に、

這一篇也在模範文選内、沙都諾夫斯奇（S. Shatunovski）
世界語訳本。

（この一篇も『模範文選』にあり、シャトヌスキーの世界
語の訳本である。）

とある。

⑥ 十九首目「夢想」。文末に、

格拉波夫斯寄（A. Grabowski）世界語訳本、載在所編万国
文選中、只註云波蘭短歌、無作者名字。模範文選裏也有這
一篇、署名達爾曼（P. Dalman）作。

（グラボウスキーの世界語の訳本が、『万国文選』の中に
あるが、注のポーランドの短歌の後に、作者の名字が無い。
『模範文選』にもこの一篇があり、ダルマンの作との署名
（²²）が有る。）

とある。グラボウスキー（1857－1921）はポーランド人。ザメ
ンホフと共に初期のエスペラント運動に大きく貢献した人物で
ある。ダルマンは詳細不明。

⑦ 二十二首「你為甚麼愛我」。文末に、

這一首由申沙耶夫（A. Sensajev）用世界語訳出、載在愛斯
普列忒（Ajspurit）編的万国小文選裏。

（この一首はセサヴィーが世界語で訳出し、アスプリット
編纂の『万国小文選』に掲載されている。）

とある。アスプリット（Aleksandr Ajspurit）は、ロシア人の
エスペランチスト。1912年に『Internacia Krestomatieto』を
モスクワで出版しており、『万国小文選』は、この書物の可能

性があるが、現物未見の為、断定できない。

⑧二十三首目の「鷹的羽毛」。文末に、

這一首也在万国小文選裏。

（この一首も『万国小文選』にある。）

とある。

以上に見て来たように世界語から翻訳されているのは、二十三首中八首であった。そしてその基になっている書籍は『模範文選』『万国文選』『万国小文選』の三冊であることが分かる。この三冊を世界語会からかり出したのである。

ではこの三冊の書物はどのような書物なのか。残念ながら『万国小文選』の詳細は不明であるが、『模範文選』はザメンホフが編集した『Fundamenta Krestomatio』である。

“fundamenta”はエスペラントで“基本的な、基礎的な”の意味、“Krestomatio”は“文選、選集”の意味である。出版年は1903年、出版地はパリで、最初にザメンホフの前言がある。全部で八章から成っており、第七章が、詩集である。①「囚人」は「La malliberulo」、②「雲雀」は「Alaŭ deto」、③「秋天」は「Aŭ tuno」、④「我説」は「Mi rakontis」、⑤「莫説」は「Ne diru」、⑥「夢想」は「Revaĵ o」とそれぞれ収録されている。『万国文選』は後述する。

第四節 静養時期の成果・『小説月報』

第一節では周作人の世界語の結実の一つとして「雑訳詩二十三首」を挙げた。では静養した時期の成果を検討していく。

周作人は西山での静養のことを『知堂回想録』「一三六 西山養病」でこう振り返っている。

我住在西山前後有五固月、一邊養病、一邊也算用功、但是这並不是什麼重要的工作、主要的只是學習世界語、翻譯些少見的作品。後來在小説月報上發表的從世界語訳出的小

説、卽是那時的成績。

（私が西山で静養した前後五ヶ月、療養しながら、仕事はしていた、しかし別に重要な仕事ではなく、只だ世界語を学習し、珍しい作品を少し翻訳した。後に『小説月報』で発表した世界語から翻訳した小説はこの時の成果である。）

この『小説月報』で発表した作品というのは、「燕子與胡蝶」「影」「二草原」「猶太人」「我的姑母」である。これら何時書かれたのか、周作人の『日記』等からまとめると以下のようになる。

1921年（2月から5月の日記はない。よほど体調が良くなかったのか）

6月 2日 西山静養開始

6月12日 得半農寄来世界語《新約》一冊。

7月 1日 上午訳ゴムリツキ小篇了。

『燕子與胡蝶』（1921年8月10日『小説報』第12卷8号、後『現代小説訳叢』）

7月 3日 訳プルース小篇了。

『影』（1921年8月10日『小説月報』第12卷8号、後『現代小説訳叢』）

7月 7日 下午訳シエンキエキチ小説了。（1921年9月10日『二草原』（『小説月報』第十二卷第九号）後『現代小説訳叢』）

7月14日 連日訳コノプニツカ小説。

7月18日 訳テトマエル小品了。

『猶太人』訳者注。（1921年9月10日『二草原』（『小説月報』第十二卷第九号）後『現代小説訳叢』）

「燕子與胡蝶」は1921年7月1日、「影」は7月3日、「二草

原」は7月7日、「我的姑母」は7月14日、「猶太人」は7月18日に書かれている。さらにこれらの『小説月報』で発表した際にはそれぞれの文末に周作人の注釈が書かれてある。

①「燕子與胡蝶」は『小説月報』第十二卷第八号（1921年8月10日）に発表されている。ポーランド人のヴィクトル・ゴムリツキの作品である。その文末に、

這一篇原名「這是燕子胡蝶們所不懂的」（Kion ne komprenas la hirundoj kaj pupilioj）。德国巴因（K. bein）博士用世界語訳出、收在所編的波蘭文選（Pola antologio、1909）裏、現在便据這一本重訳的。一九二一年七月一日記。

（これは原題は「これは燕と蝶の知らないこと」（Kion ne komprenas la hirundoj kaj pupilioj）である。ドイツのバイン博士が世界語で訳し、編纂した『波蘭文選』に収録されている。）

とある。バイン博士とは、カーベ（1827-1959）のこと。ポーランド人。ポーランド眼科学会の創設者。カーベはペンネーム。初期のエスペラント運動の指導的な役割を担うが、1911年にエスペラントから一切手を引いた人物である。

②「影」も『小説月報』第十二卷第八号（1921年8月10日）に発表されている。ポーランド人のプルースの作品である。その文末に、

這一篇也是從巴因博士的世界語波蘭文選中採取的。

（この一篇もバイン博士の世界語の『波蘭文選』から取った。）

とある。

③「二草原」は『小説月報』第十二卷第九号（1921年9月10

日)に発表されている。ポーランド人のシェンキエヴィチの作品である。文末に、

顯克微支 (Henryk Sienkiewicz 1846-1916) の小説、由我訳出的、有炭畫 (單行)、樂人揚珂、天使、燈台守 (域外小説集内以上皆文言)、曾長 (點滴内)、你祝福了 (新青年八之六)、共六篇。這一篇也是世界語波蘭文選訳出、原註云印度故事、與你祝福了同屬一類、是空想的詩的作品。格拉波夫斯奇 (Grabowski) の万国文選裏、又有他的一篇宙斯的裁判 (La juĝ ode Zeŭ s) 也是這一類的希臘的故事。(略) 七月七日附記。

(シェンキエヴィチの小説は私は訳したことがある。『炭畫』(單行本)、「樂人揚珂」「天使」「燈台守」(『域外小説集』三作品とも文言)、「曾長」(『點滴』)「你祝福了」(『新青年』第八卷第六号)、以上六篇である。この一篇もまた世界語の『波蘭文選』から訳出し、原註には、インドの故事で、「你祝福了」と同類で、空想的な詩の作品であると。グラボウスキーの『万国文選』にも彼の「宙斯的裁判」があり、ギリシャの故事である。(略) 七月七日附記す。)

とある。シェンキエヴィチ (1846-1916) はポーランド人。1905年ノーベル文学賞受賞した作家。周作人は『炭畫』を1914年4月に北京文明書局から、「樂人揚珂」は1909年3月『域外小説集』、「天使」、「燈台守」は、1909年7月『域外小説集』第二集に収録されている。「你祝福了」は1921年4月に『新青年』に掲載されている。

「曾長」は後に『點滴』に収録されるが、初出は『新青年』第五卷第四号 (1918年10月15日) である。この文末には注釈としてシェンキエヴィチのことが2ページに渡り書いてある。その最後に、

Sienkiewicz一字、照世界語拵法、是Sjenkjevie。従前用漢字合音的時候、寫作顯克微支的就是。七年八月十日識（Sienkiewiczの文字は、世界語の綴りに照らすと、Sjenkjevieとなる。以前漢字で音を表した時、顯克微支とかいたのがこれである。七年八月十日記す。）

とある。世界語の綴り方というのはよく分からない。しかし1918年には周作人は世界語について有程度の知識があったことはこれで裏付けられる。

④「猶太人」も『小説月報』第十二卷第九号（1921年9月10日）に発表されている。これはポーランド人のアダム・シマンスキの作品である。これは周作人の訳ではなく、弟の周建人の訳出であるが、文末には、周作人の注釈がある。そこには、

這篇依据英文本訳出之後、因為巴音博士的世界語波蘭文選裏也有這一篇、所以由我校對一過、發見好幾處繁簡不同的地方。

（この篇は英文の書籍に依て訳出した後、ベイン博士の世界語の『波蘭文選』にもこの一篇があったので、私が校定したところ、異なる箇所が多数見つかった。）

とある。

⑤「我的姑母」は『小説月報』第十二卷第十号（1921年10月10日）に発表されている。これはポーランド人のマリア・コノプニツカの作品である。その文末には、

這一篇小説、從世界語波蘭文選訳出。

（この小説は、世界語の『波蘭文選』から訳出した。）

とある。

以上五つの作品を見たが、いずれもベインの世界語の『波蘭文選』に依据していることがわかる。この書籍は『知堂回想

録』「二〇五 拾遺（巳）」で触れた『波蘭小説選集』を記憶違いしているのか、或はヨーロッパに行った蔡元培が送った書籍なのかどちらかであろう。

このベインの『波蘭文選』は、原題は『Pola Antologio』、作者はKABE、1909年、出版社はパリのアシェット（LIBRAIRIE HACHETTE）である。収録されているのは14名、19作品である。その中にはゴムリツキの「燕子與胡蝶」、プルースの「影」は「Ombroj」、シェンキェヴィチの「二草原」は「Du herbejoj」、アダム・シマンスキの「猶太人」は「Srul el Lubartov」、マリア・コノプニツカの「我的姑母」は「Mia onklinjo」として収録されている。

これらの作品が西山静養の成果として『小説月報』に掲載されたが、これだけに止まらない。周作人の最終的な成果として『現代小説訳叢』がある。

第三節 『現代小説訳叢』

『現代小説訳叢』は周作人、魯迅、周建人の周家の三兄弟が翻訳し出版した書物である。これは世界各国の小説を訳したもので、多くは世界語からの訳出である。『学生雑誌』「学生世界語欄」（第十三卷第四号、1926年四月）にも、

荷蘭、波蘭、芬蘭、葡萄牙、希伯来、保加利亞、捷克斯洛伐克……的絕妙的文学、已都世界語訳本啦。例如周作人先生的小説訳叢、以及小説月報跟東方雜誌上魯彦先生所訳的小説、有許多篇都是從世界語本子来的。

（オランダ、ポーランド、フィンランド、ポルトガル、ヘブライ、ブルガリア、チェコスロバキア……の素晴らしい文学は、すでに世界語の訳本がある。例えば周作人先生の『小説訳叢』、及び『小説月報』と『東方雑誌』での魯彦先生が訳した小説で、多くのものが世界語の書籍から来ている。）

とある。

『現代小説訳叢』は1922年5月、上海商務印書館から出版され、魯迅9篇、周作人18篇、周建人3篇の合計30篇から成っている。前述した「二草原」「影」「燕子與胡蝶」「我的姑母」「猶太人」⁽²³⁾は収録されているが、それ以外にも世界語からの訳出作品がある。それを以下に見ていく。

①「愿你有福了」

これはシェンキェヴィチの作品であり、1921年4月1日『新青年』（第8巻第6号）に発表された。日記には1920年に「12月24日 上午訳世界語本小説」とあるのが「愿你有福了」であろう。この文末に事情が書いてある。

顯克微支（Henryk Sienkiewicz 1846-1916）的事情、我在域外小説集及點滴上曾講到一點、所以現在不再說了。這一篇是据波蘭人格拉波夫斯奇（Grabowski）的世界語訳本訳出、本来載在万国文選裏邊。（略）

這篇小説和以下的兩兩篇、性質上並沒有什麼聯屬的地方、只因為都是從世界語訳出、所以併作一起發表了。一九二零年十二月二十四日記。

（シェンキェヴィチのことは、私は『域外小説集』と『點滴』においてすこし触れたことがある、それ故に今は言わない。この一篇はポーランド人のグラボウスキーの世界語の訳本から訳出したが、元々は『万国文選』に掲載されている。（略）この小説と以下の二篇は、その性質上何か関わっている所はない、只だすべて世界語から訳出したので、一緒に発表した。1920年12月24日記す。）

グラボウスキー（Antoni Grabowski、1857-1921）はポーランド人で、ザメンホフと共に初期エスペラント運動に貢献した人物である。ここでいうグラボウスキーの世界語の訳本とは、『Antologio Internacia』であろう。「雑訳詩二十三首」でも出てきた『万国文選』は、『小説月報』第十六巻第四号に掲載

された王魯彦訳「宙斯的裁判」の注釈に以下のようにある。

這一篇据波蘭格拉波夫斯奇 (A. Grabowski) 諸編万国文選 (Antologio Internacia) 中世界語訳本訳出。
(この一遍はグラボウスキー編纂の『万国文選』
(Antologio Internacia) の世界語の訳から訳出した。)

『Antologio Internacia』は、1904 (?) 年にパリのアシェットから出版され、「KONDUKANTO」と「ANTOLOGIO」の二部構成である。シェンキェヴィチの作品も収録されており、「愿你有福了」の原題は、「Estu benata」である。

『二草原』の所でも言及しているが、これまで何度も出て来たシェンキェヴィチは、周作人が魯迅と共に留学時期に出版した『域外小説集』から着目していた人物であった。

②「世界的儼」

これはプールの作品であり、これも1921年4月1日『新青年』(第8巻第6号)に発表された。日記の1920年9月23日に「訳世界語本小説二篇」と有る内の一篇がこれであろう。文末にプールの人物紹介があり、最末尾に、

這一篇也是据格拉波夫斯奇世界語訳本、從万国文選裏訳出。一九二〇、九、二八、訳者附記。

(この一篇もまたグラボウスキーの世界語の訳本に依据し、『万国文選』より訳出した。1920、9、28、訳者附記す。)

「愿你有福了」同様、グラボウスキーの『Antologio Internacia』に依据していることがわかる。『Antologio Internacia』には「La ŝimo de l'mondo」として収録されている。

③「一滴的牛乳」 (Guteton da Lakto)

これはアルメニア人のアグランジョン (Agaronjan) の作品

で、これも1921年4月1日『新青年』（第8巻第6号）に発表された。日記の1920年9月23日に「訳世界語本小説二篇」と有る内的一篇がこれであろう。文末にはこの人物の詳細が不明なことが書かれてあり、最後に、

近日在愛斯普列忒（Ajspurit）編的万国小文選裏、看見達列陀夫^{（24）}世界語的這一篇的訳本、非常喜歡、便將他翻譯出來。承孫芾仲先生借書給我、使我能夠訳出這篇、我狠感謝。一九二〇年九月三十日記。

（最近アスプリット編纂の『万国小文選』を見ると、その中に達列陀夫の世界語のこの一篇の翻譯を見つけ、非常に喜び、それを翻譯した。孫芾仲先生が書籍を貸してくれたので、私は翻譯することができた。非常に感謝する。1920年9月30日、記す。）

とある。承孫芾は前述した北京大学の世界語の講師。その孫から借りた書物が『万国小文選』。「雑訳詩二十三首」の22首の「你為甚麼愛我」もこの書籍に依据している。

結語

以上に周作人の留学時期から『雑訳詩二十三首』『現代小説訳叢』に収録されている世界語に関係する書籍をみてきた。

周作人は日本に留学していた時期は、エスペラントが流行しており、直接の記述はないが、恐らく世界語に触れていたと考えられる。

その後帰国した周作人は、世界語に対する興味関心は決して失われず、学習していた。そして『雑訳詩二十三首』という形で実を結んだ。そして体調を崩し、療養に入るが、回復後、その時今まで貯めていた世界語に対する情熱を書籍と言う形でまとめた。

その依据している所の書籍は、『模範文選』『万国文選』『万国小文選』『波蘭文選』の四冊であった。それらは、買っ

てきてもらった物や借りた物があるが、何故このようにしてまで、世界語から翻訳したのであろう。

それは、決して片手間にやったのではない。周作人が述べているように、留学時代に出版した『域外小説集』の延長に、この翻訳や出版の動機がある。留学時代に若き魯迅、周作人は、当時列強に食い物にされていた祖国のことを思い、弱小民族の悲惨を憂い、『域外小説集』を出版した。その中には、当時亡国の憂き目をみたポーランドの作家シェンキェヴィチらが収録された。

その後周作人は中国に戻るも、恐らく祖国は周作人の目からみれば、亡国の憂いを脱したとは言いがたいものであったであろう。その思いを伴い世界語の学習は続け、北京大学に職を得る。北京大学では蔡元培の肝いりで、世界語の授業が始める。当然周作人もそれに関係し、世界語の書籍に触れ合う機会も増えた。その成果が『雑訳詩二十三首』である。

その後体調を崩し、時間ができたのを契機に、世界語の翻訳を開始する。その結果が『小説月報』の翻訳であり、その結実の『現代小説訳叢』であった。その収録されているのは、やはり弱小民族の悲哀であった。その弱小民族の代表であるポーランドの文学は、世界語に多く翻訳されていた。何故ならエスペ란托の創始者・ザメンホフがポーランド人だったからである。世界語は弱小民族の言語であったのだ。

この『現代小説訳叢』以後、エスペランチストのエロシェンコが日本から来ると、周作人は依然として世界語に関わり続ける。

〈注釈〉

- (1) エスペ란トの訳語である世界語は、日本で使用され、中国人留学生が後に中国に持ち帰った。錢玄同「答孫国璋論Eeperento」に「這“世界語”三個字、係日本人所訳」とある。
- (2) 北京世界語専門学校については、拙稿「民国初期の世界語ー北京世界語専門学校を中心に」（『中国言語文化研究』第十号、2010年7月1日）参照。
- (3) 手塚登士雄、『トスキアナ』一号、2005年4月15日、トスキアナの会。
- (4) 藍天強主篇、2002年8月1日、中国世界語出版社。
- (5) 侯士平、<http://www.elerno.cn/movado/movado197.htm>
- (6) 社会主義講習会については、嵯峨隆、『近代中国の革命幻影 劉師培の思想と生涯』、1996年4月1日、研文出版に詳しい。
- (7) 『民報』第21号、1908年6月10日。
- (8) 初芝武美、1998年10月3日、財団法人日本エスペ란ト学会。
- (9) 周作人が『天義』に発表した論文は、以下の通り。
 - 「偶成三首」、1907年7月25日、『天義』第4期。
 - 「婦人選挙権問題」、1907年7月25日、『天義』第4期。
 - 「婦人選挙権問題続」、1907年9月15日、『天義』第7期。
 - 「愛理薩阿什斯珂」、1907年9月15日、『天義』第7期。
 - 「喬治愛里阿德」、1907年9月15日、『天義』第7期。
 - 「西伯利亞之囚」、1907年9月15日、『天義』第7期。
 - 「斯諦勃鄂克」、1907年10月30日、『天義』第8・9・10期合刊。
 - 「裴彖飛」、1907年10月30日、『天義』第8・9・10期合刊。
 - 「文章之力」、1907年10月30日、『天義』第8・9・10期合刊。
 - 「中国人之愛国」、1907年11月30日、『天義』第11・12期合刊。
 - 「見店頭監獄書所感」、1907年11月30日、『天義』第11・12期合刊。
 - 「坊淫奇策」、1907年11月30日、『天義』第11・12期合刊。
 - 「論俄国革命與虛無主義之別」、1907年11月30日、『天義』第11・12期合刊。

(10) 『天義』の世界語に関する記載は以下の通り。

「本社重要広告」に「世界新語文法書」とある。1908年1月15日、第15期。口絵にザメンホフの肖像画、「貧民唱歌集」にザメンホフの詩二首及び「ESPERANTO詞例通釈總序」が劉師培の訳で掲載。1908年3月15日、第16・17・18・19四冊合刊。

(11) 1908年の出来事。

(12) 錢玄同の世界語に関する主な論文や発言は以下の通り。

「論世界語與文学」、1917年6月1日、『新青年』第3巻第4号。

「答陶履恭論Esperanto」、1918年2月15日、『新青年』第4巻第2号。

「中国今後之文字問題」、1918年4月15日、『新青年』第4巻第4号。

「答孫国璋論Esperanto」、1918年4月15日、『新青年』第4巻第4号。

「論Esperanto 區聲白」、1918年5月5日、『新青年』第5巻第2号。

「論Esperanto 孫国璋」、1918年5月5日、『新青年』第5巻第2号。

「對於朱我農君兩信的意見」、1918年10月15日、『新青年』第5巻第4号。

「渡河與引路」、1918年11月15日、『新青年』第5巻第5号。

「中国文字與Esperanto 姚寄人」、1918年11月15日、『新青年』第5巻第5号。

「中国文字與Esperanto 胡天月」、1918年11月15日、『新青年』第5巻第5号。

「中国文字與Esperanto 區聲白」、1919年1月15日、『新青年』第6巻第1号。

「Esperanto 周祐」、1919年2月15日、『新青年』第6巻第2号。

「Esperanto與現代思潮」、1919年2月15日、『新青年』第6巻第2号。

「悼馮省三君」、1924年6月23日、『晨報副刊』。

(13) 1924年5月20日、『晨報副刊』。

(14) 1917年6月1日、『新青年』第3巻第4号。

(15) 大杉栄とエスペラントの関わりは、以下の文献が詳しい。

『大杉栄とエスペラント運動』、宮本正男、1988年2月、黒色戦線社。

「日中エスペラント交流史の試み」、高杉一郎、1966年、『文学』34号、岩波書店。

「大杉栄のみた中国」、川上哲正、2002年、『初期社会主義研究』15号、初期社会主義研究会。

「日本の初期エスペラント運動と大杉栄らの活動（一）」、手塚登士雄、2006年10月、『トスキアナ』第4号、トスキアナの会。

「日本の初期エスペラント運動と大杉栄らの活動（二）」、手塚登士雄、2007年4月、『トスキアナ』第5号、トスキアナの会。

(16) 周作人の大杉栄に関する文章は、

「大杉栄之死」、1923年9月25日、『晨报副鐫』。

「大杉事件的感想」、1923年10月17日、『晨报副鐫』。

(17) 今回利用した日記は、以下の通り。

『周作人日記 上・中・下』、1996年12月、大象出版社。

『魯迅研究資料13』「周作人日記」、1984年7月、北京魯迅博物館魯迅研究室編、天津人民出版社。

『魯迅研究資料14』「周作人日記」、1984年11月、北京魯迅博物館魯迅研究室編、天津人民出版社。

『魯迅研究資料18』「周作人日記」、1987年10月、北京魯迅博物館魯迅研究室編、天津人民出版社。

『魯迅研究資料19』「周作人日記」、1988年7月、北京魯迅博物館魯迅研究室編、天津人民出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1983年、第3期、人民文学出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1983年、第4期、人民文学出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1983年、第3期、人民文学出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1984年、第1期、人民文学出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1984年、第2期、人民文学出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1984年、第3期、人民文学出版社。

『新文学史料』「周作人日記」1984年、第4期、人民文学出版社。

(18) 大杉は1906年9月17日、本郷一岐殿坂私立習性小学校でエスペラント語学校を開設。12月16日終了。

(19) 初期のエスペラントの書籍の出版は、パリのアシェット社が独占的に担っていた。『ザメンホフ』「153 契約成立」（いとうかんじ、1972年、永末書店）に詳しい。

- (20) 『新青年』第8巻第3号に掲載された「雑訳詩二十三首」は後に『陀螺』「雑訳詩二十九詩」（1925年9月）として出版された。収録作品は6首増えており、さらに序文が全く異なった文章になっている。
- (21) ドブロンスキーについては、「ラトヴィアのLibeksとリトアニアのDombrovshiー初期のEsperanto文献ー」（『奈良大学紀要』第5号、川崎直一、昭和51年12月）を参照。
- (22) 『模範文選』「夢想」の原文は、「REVAĴ 0（De P. Dalman.）」とダルマンの署名がある。
- (23) 『現代小説訳叢』収録の「影」には注釈は無い。
- (24) アルファベット表記があるが印刷不明瞭の為、判別できない。

主要参考文献

- 『周作人散文全集』、鐘叔河編訂、2009年4月、広西師範大学出版社。
- 『周作人訳文全集』、止庵編、2012年3月、上海人民出版社。
- 『周作人年譜』、張菊香、張鉄栄編著、1999年、天津人民出版社。
- 『知堂回想録』、周作人、1980年11月、三育図書有限公司。
- 『錢玄同文集』、錢玄同、1999年4月1日、人民大学出版社。
- 『中国資料叢書6』「天義」、1966年2月、大安。
- 『原典中国アナキズム史料集成 第7巻』、坂井洋史・嵯峨隆編、1994年4月20日、緑蔭書房。
- 『民聲』、師復等、1992年10月10日、朋友書店。
- 『日本エスペラント運動史料』、昭和31年11月1日、日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編、日本エスペラント学会。
- 『近代中国の革命幻影』、嵯峨隆、1996年4月1日、研文出版。
- 『エスペラント便覧』、坂井松太郎、福田正男、加藤孝一編、1967年9月20日、要文社。

『周作人伝ーある知日派文人の精神史ー』、劉岸偉、2011年10月30日、ミネルヴァ書房。

「世界エスペラント大会について」、『文学』、高杉一郎、1965年8月、岩波書店。

「20世紀初期の中国における国際連帯 活動とエスペラント受容」『アジア太平洋討究22』、崔学松、2014年3月27日、早稲田大学アジア太平洋研究センター。

「万国と新の意味を問いかけるー清末国学におけるエスペラント（万国新語）論ー」『東洋文化研究所紀要147』、林義強、2005年3月、東京大学東洋文化研究所。